

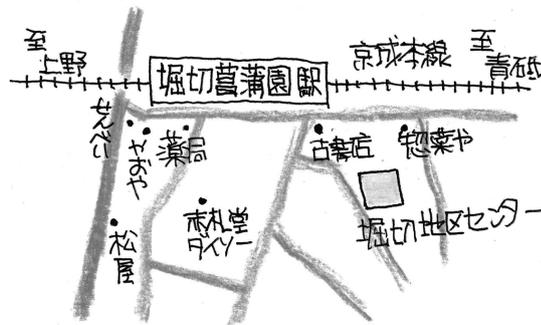
民主的な立場の人たちは、豊臣秀吉の「朝鮮征伐」が、壮挙でも国威発揚でもなく、理不尽な侵略であったことぐらいは知っている。しかし、その人たちでも、当時、朝鮮の民衆がいかにも頑強に闘ったかということ、日本軍が、実はさんざんの敗北をなめたのだということについてはほとんど知らない。*1

重大な結果をはらむ誤謬とは、民族的段階をとび越えようとする事だ、と。もし文化が民族意識の表明であるならば、私はためらうことなく断言するだろう。当面のこの場合、民族意識は文化の最も洗練された形式である、と。*2

- テキスト 寺尾五郎ほか『日朝中三国人民連帯の歴史と理論』*1
はじめに、第一講 日本の朝鮮侵略史（日本朝鮮研究所、1964年）
- フランツ・ファノン『地に呪われたる者』*2
4 民族文化について（みすず書房、1996年）

日時 **2月28日** 場所 **葛飾区立堀切地区センター 第二会議室**
(土曜)午後1時15分～5時 京成本線「堀切菖蒲園」駅徒歩4分、葛飾区堀切3-8-5

13:15~14:00	報告(前田年昭)と質疑 「はじめに」「日本の朝鮮侵略史」
14:00~14:45	報告(キム・ヨンイル)と質疑 「民族文化について」
15:00~17:00	討議



参加費 ひとり**500円**(要予約)

主催(予約) 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com
電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。テキストが入手できない方はご連絡ください。
- 当日は報告者の提起と感想や意見の交流、討議を行います。あらかじめ対象テキストを読んできてください。

植民地主義を克服できぬ資本主義国で生きる私たちにとって抗日闘争の歴史は、日常的にはもちろん、教育・学問上、反体制運動においてさえ、遠く隔てられています。10回の読書会で手ぶらで回想記を読む私たちがまず捉えたのは、回想記のリアリティでした。

寒さと飢えのなか繰り返される行軍に及ばなさを感じながらも、負傷した同志を見捨てず背に負い雪道を進む姿に労働者階級の思想を見、武器を手にする女性兵士に立ち上がる労働者の姿を重ね、日本兵に壊された鍋を直し煮炊きする創造性に日々の労働者を思い、女性や子供が被害者でなく主体的な抵抗者として描かれる事実に共鳴し、闘う者のエネルギーに圧倒されながら力を得、夢見る明日に社会主義への展望を確信し——回想記のパルチザンたちに、

労働や運動の現場での自身や仲間たちを重ね見て、私たちは次第に朝鮮人民の抗日闘争が確かにあったのだということを実感していきました。

それは、翻訳者の鈴木武さんが「この人たちを永遠に生かすために、なんとしてもこの翻訳を完成させよう」と念じた、ひとりひとりのパルチザンのリアリティを根拠としますが、加えて私たちは回想記を、集団的な闘いの実践例として読みました。祖国光復会十大綱領に運動内分裂と対立を克服する術を探し、満身創痍の後退からの住民の助けを得て反転攻勢に転ずる様に人民との結合の大切さを確認し、工作や防諜のエピソードに組織活動や闘争のなかで遭遇する矛盾や悩みを重ね、仲間となるために何をなすべきか、やっつけられないことは何か、一線はどこに引かれるべきか、考え議論し続け【裏へつづく】

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒
264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



【表からのつづき】ました。

私たちはあくまで実践的に回想記を読み進め、ゆえに時に、回想記への批判も展開されました。なかでも歴史を語り継ぐ際の「虚」について議論は紛糾しました。民話がそうであるように、フィクションが含まれることと現実性ないし真実であることは矛盾しない。日本で未だ実現されたことのない社会主義国家の建国神話として読み進めること、社会主義を目指すなかでの苦渋、痕跡として読み取ることが提案され、一方で（特定の具体的な部分について）大切な歴史への裏切りであり悔しいとの批判が出され、抑圧民族である日本人が批判することの意味が問われ、革命を志す者として率直に批判して乗り越えたい、間違いも教訓として引き継ぎたいと応じる者があり、容易に決着できません。

回想記を読むには立場が問われます。安易な肯定や否定に走らぬため、私たちは自らの思想（見る目・感じる心）を鍛える必要があります、ここでいったん回想記を読むことを休止して、東アジアの抗日戦線、植民地支配の歴史について、民族と階級について、共産主義

者の連帯の思想について、学ぶ時間を作りたいと思います。

回想記を読むなかで常に意識させられたのが、抗日闘争のふたつの側面でした。「民族解放闘争」の意義が確信され、日本人民として排外主義を克服せねばすまないことが確認されると共に、この闘いが社会主義を目指す「階級闘争」であることが、私たちとパルチザンとを結びつける大切な糸でした。遠く隔てられた闘いを、私たちがリアリティをもって受け止めたのは、それゆえだったとも言えます。

「民族的といっても根底は階級的」という^{キムサンテ}金相泰の言葉を一つの手掛かりとして、国際主義を理論的・肉感的な確信にまで深めるために、第二期として回想記読書会を開始／継続します。このやり切れない状況にあって、成果が直ちに現れるということにはならないかもしれませんが、日本人民の排外主義を克服するための努力を続けたいと思います。「明けてくる明日」について共に語ろうとする仲間の参加を広く呼びかけます。（文責・田代ゆき）

寺尾五郎ほか『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』（日本朝鮮研究所、1964年）

はじめに、第一講「日本の朝鮮侵略史」

第一講・日本の朝鮮侵略史、第二講・日朝中人民の闘いの歴史、第三講・戦後日朝関係の問題点、第四講・日朝友好運動の意義と役割——の四部からなる本書の特徴は、日本の植民地支配に対する朝鮮人民の不屈の抵抗に光をあてたこと、彼らと「同じ一つの歌」を歌おうと闘い続けた日本人民の歴史を描いたことにある。1961年、韓国の朴正熙政権は日本との国交正常化を急ぎ、62年に対日請求権について基本合意するが、64年には韓国で反対運動が起き、政府は戒厳令を布く。日本の労働者人民は、この条約を加害責任を覆い隠し、朝鮮の南北分断を固定するものと考え、反対の声をあげた。このとき本書は、反対運動への方針提起として書かれた。翌65年、日韓両政府は日韓条約を締結、韓国政府を半島唯一の合法政府と確認し合う。日本の労働者人民は、条約は日・韓・台の反共軍事同盟だと捉え、条約批准反対運動を繰り広げた。日韓条約反対闘争は、日本の植民地主義を清算、克服できるかどうかを問うた戦後初めての闘いでもあった。翻っていま、労働者自身は、歴史を修正し、手をつなぐべき中国・朝鮮の労働者を攻撃するところまで後退している。なぜか。この現状を変えるにはどうすればいいのか。朝・中人民と「同じ一つの歌」を歌うために何ができるのか、ともに本書を読み、議論したい。

（文責・前田年昭）

フランツ・ファノン『地に呪われたる者』（みすず書房、1996年）

第四章「民族文化について」

今回、ファノンを選定しようと思ったのは、『思想運動』1114号、林裕哲（リム・ユチョル）「第三世界のなかのレーニン思想」の連載第五回「アフリカの革命運動における前衛」を紹介され、興味深く読んだことから始まる。それは、植民地解放闘争をいかに闘うかをアミルカル・カブラルの思想から学ぶ、というものであるが、カブラルの「階級的自殺」、ゲバラの「社会主義における新しい人間」、ファノンの「全的人間」という概念はともに、革命運動における人間の改造——新しく生まれ変わることの意義を説いている。ファノンは、フランス植民地マルティニーク島生まれ、中産階級出身の精神科医である。植民地の原住民プチ・ブルジョワジーであるがゆえに支配の現実に目覚め、二重の自己否定を経て、アルジェリア革命に身を投じた。民族解放闘争が新植民地主義に包摂されないためにも、民族内の階級を割って出ることは極めて重要である。そして、ファノンの思想がさらに重要なのは、自らの内なる白い仮面を打ち砕くだけでなく、黒い皮膚をも突き破ることで、新たな人間へと生まれ変わろうとするからだ。そして、民族主義ではなく、民族意識。民族の文化とは、かつてあった／ありうべき本質を回復したり承認するのではなく、新たな秩序を構成する＝革命の過程のなかで生み出されるものであるはずだ。（文責・キム・ヨンイル）